

はやし
林

よし
能

てる
輝

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 191 号
学位授与年月日	平成17年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad 第 I 卷 —校訂テキスト、翻訳、分析と研究—
論文審査委員	(主査) 教授 後藤 敏文 教授 桜井 宗信 教授 千種 眞一

論文内容の要旨

古ウパニシャッドの一つである『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』(前6世紀頃)は、輪廻と業、個人主体の存在を巡る教説などをその中に含み、後のインド思想展開の基礎を築いた。仏教やジャイナ教などの「新思想」は、ここに確立された思想を受け継ぎつつ、それを超克しようとしたものとも見なしうる。

1. 研究史について

『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド (Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad)』(以下BĀUと略記)については、これまで多くの翻訳や研究がなされてきた。しかし、従来の諸研究には多くの問題があり、テキスト、翻訳、内容解釈の全ての点で、今日改めて検討する必要がある。

伝承にはMādhyandina派(M派)とKāṇva派(K派)の二つが存在する(以降BĀU-M、BĀU-Kと略記)。これら二伝承の中、一般に流布しているのは後8世紀頃のシャンカラが注釈をつけたBĀU-Kである。シャンカラはアクセント表記のない複数の写本を用いていたことが立証されているが、この流布本が現代にいたるまで伝統的に用いられてきた。研究もこれに基づくものが殆どである。しかし、ヴェーダ語文献の解釈がアクセントによって一義的に確定されたり、改められたりすることは、研究史上しばしば経験されてきたところである。ヴェーダ語で著されたBĀUの読解にあたっては、アクセントを考慮することが不可欠である。BĀU-Kもアクセント表記を伴ったテキストに基づいての研究が課題として残されている。さらにM派とK派の伝承は、語彙や構成において相違を見せるため、M派の伝承を併せ用いたBĀUの研究が必要とされる。

ウパニシャッドは、祭式に関する解釈、思弁を主要内容とするブラーフマナ文献の展開を受け継ぐ形で成立したものである。祭式の役割は後退し、より抽象的、普遍の問題が考察の主対象となっているとはいえ、ウパニシャッドの母胎となり、これに材料を提供したブラーフマナ文献の精査なしには理解できない点が多い。ウパニシャッド文献の中でも特に成立の早いBĀU、とりわけI-II巻には、このことが特に当てはまる。これまでの研究、解釈には、そうした文献成立の背景に対する考慮が十分ではなかった。また、文献成立後1000年以上後の、シャンカラをはじめとするヴェーダンタ諸学派の学匠による哲学的解釈が、原典理解に直接持ち込まれることもしばしば行われた。

こうしたこれまでの研究状況に対し、近年ウパニシャッド文献について、それがブラーフマナの祭式思弁を受け継ぎつつ発展させたものであるという歴史的過程を重視し、その成立の具体的展開を明らかにする研究が発表されるようになった。Taittirīya-Upaniṣad II 1-6及びMaitrāyaṇīya-Upaniṣad VI 33に見られる教説が、アグニチャヤナ祭（大規模火壇構築祭）を巡る神学的解釈、思弁を下敷きとしていることを指摘した井狩弥介「アグニチャヤナ祭式と古ウパニシャッド」（1975）は、その嚆矢といえるべきものである。また、後藤敏文“Zur Lehre Śāṅḍilyas —Zwischen Brāhmaṇa und Upaniṣad—”（1996 [1997], 邦文先行論文「Śāṅḍilyaの教説再考—BrāhmaṇaとUpaniṣadとの間—」1996）は、従来、「梵我一如」を説くものとして、本質的な相違を持たないとみなされてきたŚatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina派) X 6,3及びChāndogya-Upaniṣad III 14に見られる「シャーンディリヤの教説」について、前者は実際のアグニチャヤナ祭を巡る神学的意義付け、解釈であり、後者はそれを利用してアートマンとブラフマンに関する教説へと改変したものであることを示し、両者の差異を明らかにすると共に、ブラーフマナからウパニシャッドへの発展の具体例を提示している。ウパニシャッドを、抽象的・観念的レベルにおいて読むのではなく、その成立背景の一つである具体的な祭式行為との関連から読み解く試みとして、藤井正人による、初期ウパニシャッドの一つJaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇaをめぐる一連の研究が挙げられる。更に、ウパニシャッドをヴェーダ語そのものから読み解き、従来行われてきた、後世の注釈家の解釈等に影響された諸研究の誤りを指摘し、その内容を明らかにした後藤敏文「Chāndogya-Upaniṣad IV 1-3 「PautrāyaṇaとRaikva」」（1994）；“Zur Geschichte vom König Jānaśruti Pautrāyaṇa (Chāndogya-Upaniṣad IV 1-3)”（1996）は、ウパニシャッド研究において従来軽視されてきた言語面からの理解の重要性を示したものとして、画期的意義を持つ。

また、ウパニシャッド文献の前提となるブラーフマナに関しても近年目覚ましい研究の進展が見られる。思想史上では、後のカルマ（業）説につながる、iṣṭāpūrta（祭式と布施の効力）の概念を巡り、サンヒターからブラーフマナにいたるまでの、その具体的展開と概念内容とを明らかにした阪本（後藤）純子「iṣṭā-pūrtā-「祭式と布施の効力」と来世」（1996）；“Das Jenseits und iṣṭā-pūrtā- ‘die Wirkung des Geopferten-und-Geschenken’ in der vedischen Religion”（2000）は重要な意義を持つ。伏見誠「祭祀において作られるātman」（1995）は、祭式の行作を通じて来世の自己（アートマン）を作り上げるという、ウパニシャッドにおける個人存在の主体を巡る思弁の、一つの前提をなす思想を、具体的なテキスト箇所を挙げ、呈示した。また、BĀU、Chāndogya-Upaniṣadの「五火二道説」として最終的にまとめられるに至る、輪廻に関わる教説は、思想史上の重要性によって古くから研究者の注目を集めてきたが、その中核を成す「五火説」成立の経緯について、阪本（後藤）純子の一連の研究“Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka”（1998）；“kathām-katham agnihotrām juhutha—Janakas Trickfrage in ŚB XI 6,2,1—”（2000）は、そのブラーフマナにおける発展過程を具体的に跡付けている。「二道説」については、BODEWITZによるJaiminīya-Brāhmaṇaの翻訳研究により、その具体内容が一層近づきやすいものとなった。

2. 本論文における研究方法

本論文の提出者は、以上概観した研究史の問題点を踏まえると共に、近年のウパニシャッド、ブラーフマナの諸研究の成果を活かして、BĀUの内容の精密な検証を目指している。本論文では、全六巻からなるBĀUの第I巻を対象を絞り、テキスト校訂、翻訳、分析と解釈研究の三点について作業を行った。

2-1. テキスト校訂

BĀU-Mは、現行では独立の刊本は存在せず、それが含まれるMādhyandina派Śatapatha-Brahmaṇa (以下ŚB-Mと略記)の諸刊本に収められているものが用いられている。唯一の例外として、BÖHTLINGKによる刊本があるが、これは基本的にWEBER校訂のŚB-Mを底本としたものであり、BÖHTLINGK自身の、ややもすると恣意的な読みやアクセントの修正がなされており、厳密な意味での校訂本とは言い難い。一方、BĀU-Kには、シャンカラ注を伴ったものを含め多くの刊本が存在する。これらの刊本には、全てアクセント表記が伝承されていない。アクセント表記を伴うBĀU-Kの刊本は、複数の写本に基づいて、1976年にMAUEにより第I巻部分の校訂本が出版され、更にこれに続く形で、1992年にPÉREZ COFFIEにより第II巻が出版された。

こうした事情から、本論文においてはBĀU-M第I巻について、現在刊行されているŚB-Mの諸刊本を照合し、適切かつ妥当な読みを確定した。各刊本の読みの相違は、全てこれを脚注に収録した。更に、MAUEによるBĀU-K第I巻の校訂エディションに基づき、K派の読みを併せて検討し、両派の伝承を対照できるよう呈示した。

2-2. 翻訳

BĀUには、部分訳をも含め、数多くの翻訳が存在する。先ずBĀU-Mの全訳としては、BÖHTLINGKによるものがある。ただし、これは彼自身の手になるBĀU-Mの校訂本に基づくものであり、その校訂自体に問題があるため、必ずしも信頼できる翻訳とは言いがたい。また今日のVeda学の水準から訂正が必要とされる箇所も少なくない。一方、BĀU-Kの翻訳は極めて多いが、いずれもアクセント表記を欠いた伝統的流布本に基づくものである。

本論文では、上述の作業から得られた校訂テキストに基づき翻訳を行った。翻訳には、内容の理解を助けるため、多面的な訳注を付した。内容理解のための補足的説明に止まらず、文法、シンタックスに関する事項、当時の文化・生活・習俗に関わる点などに亘って、これまでのヴェーダ研究の諸成果にも言及しつつ注解をした。また、必要に応じ、ブラーフマナやウパニシャッド、その他の文献から、内容上関連する箇所を引用し、論じられている問題の背景や、並行箇所が明確になるよう努めた。

2-3. 内容の分析と研究

上記の翻訳によって得られた理解を基に、あるいはそれとの相互関係の中で、第I巻の各章について分析、検討を行った。その際、先ず各章のシノプシスを提示し、内容の梗概を記した。さらに、各章の中心テーマについて、それがいかなる論理、背景の下に示されているかを論じた。それぞれの章の主題の分析から、BĀUの第I巻は、その他の巻に比して成立が早く、いまだ祭式思弁の要素を濃厚に残す箇所であると結論される。そのため、先行する資料をブラーフマナを中心に提示し、ブラーフマナからウパニシャッドへの歴史的、思想的発展の観点を重視し、考察を行った。

3. BĀU第I巻の内容について

本研究を通じて明らかとなったBĀU第I巻の各章の内容を、従来指摘されてこなかった点を中心に、以下に記す。なお、M派とK派との間には、第I巻に含まれる章の数に違いがある。その為、以下の見出しには、それぞれの派における章番号を併記した。

(1) ŚB-M X 6, 4, 1 ~ BĀU-K I 1

本章（以下、BĀU I 1と略記）では、アシュヴァメーダ祭で犠牲とされる馬について、その頭を始めとする各身体部位が曙や太陽などの自然界の諸事物と等置され、馬の海からの出生などが述べられる。この章には、従来、単に「犠牲となる馬を宇宙の諸事象と対応させ、その偉大さを称えている」といった表層的な解釈が与えられてきた。しかし、本章は、BĀUに先行するブラーフマナ文献Taittirīya-Samhitā (TS) VII 5, 25と、構成・内容から、用いられている語句に至るまで殆ど一致し、本章がTSを基に作成されたことは明らかである。TSの同箇所は、アシュヴァメーダ祭の神学的解釈を意図したものであり、実際の祭式の次第に沿って叙述が行われていることが、詳細な検討から明らかとなった。

TSの主眼は、祭式に用いられる馬に関する知識が祭式の効果に必須であることを説く点にある。それと比較した場合、BĀU I 1では(1)馬に関する知識の効果が説かれていないこと、(2)馬と太陽との等置がTSに比して一層明瞭に打ち出されていること、の二点が特色として挙げられる。BĀU I 1とこれに続くI 2との関係は従来看過されてきたが、この(2)太陽との等置の強調は、両者の間の緊密な連関を示唆する。即ちBĀU I 1は、祭式に用いられる馬を太陽と等置することにより、次章に説かれるアシュヴァメーダ祭を巡る神学議論の一つの前提をなしているものと考えられる。

(2) ŚB-M X 6, 5 ~ BĀU-K I 2

本章（以下、BĀU I 2と略記）は、擬人化された「死」が太初において馬を犠牲にしたというアシュヴァメーダ祭の一種の起源譚を説き、それを枠組みとして、アシュヴァメーダ祭による再死の克服を、祭式の行作の神学的解釈により根拠付けている。本章に現れるarkā-という語は、従来、単に「祭火」を意味するとされてきたが、筆者は、この語がアグニチャヤナ祭において築かれる火壇を指し示すことを明らかにし、本章がアグニチャヤナ祭の祭式解釈を背景に成立していることを明らかにした。

BĀU I 2は、火壇の構築から馬の犠牲に至るアシュヴァメーダ祭の実際の流れを軸として構成されている。この火壇と馬とを、それぞれ、祭火及び太陽と等置することを通じて、アシュヴァメーダ祭を行うことによる再死の克服が根拠付けられている。

BĀU I 1及びI 2は、共にM派では、アグニチャヤナ祭を巡る神学議論を集めたŚB-M第X巻「アグニラハスヤ（アグニチャヤナ祭の秘儀）」の末尾を占めているが、従来そのことは殆ど顧慮されてこなかった。筆者は「アグニラハスヤ」に含まれる他章との間に、用いられる語彙や論理の点で類似性、共通性があることを指摘し、これら二章が、本来「アグニラハスヤ」に含まれていたことを結論付けた。BĀU第I巻部分は、先にM派で成立し、BĀU-Kは、これら二章を付け加える形で自派のウパニシャッドに編集し直したものと推測される。

(3) BĀU-M I 1 ~ BĀU-K I 3

本章（以下BĀU I 3と略記）は、アスラたちと争い合っていた神々が、視覚機能を始めとする生体諸機能をUdgātar祭官として用い、udgītha（ソーマ祭において朗詠される歌詠の中核部分であり、Udgātar祭官が独唱する）を歌わせることによって勝利を得ようとする、というブラーフマナ以来しばしば用い

られる「神々とアスラたちとの争い」をモチーフとして構成されている。BĀU I 3の主題の一つは、生体諸機能における氣息 (*prāṇā-*)の優位性を述べることにある。視覚機能等の諸機能がことごとく失敗したのに対し、口の中に存在する氣息が最後にUdgātar祭官となってアスラ達を滅ぼすことに成功したという因縁譚によって、氣息の優位性を根拠付けている。

BĀU I 3は、ほぼ同時期に成立したと考えられる、Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa (JUB) と Chāndogya-Upaniṣad (ChU) に並行箇所を有し、またそれがJUBを基に作られたと考えられることは、既に先行する諸研究において指摘されている。本稿では、JUB, ChUの並行箇所を訳出し、BĀU I 3と比較考察を行い、以下の点を指摘した：

(1) BĀU I 3は、基となったと考えられるJUBと概ね内容が一致するが、その部分を核として、更にJUBにはない、旋律に関する考察や、不死の獲得のために行うべき具体的祭式行為の規定などを述べる点に特色を持つ。

(2) ChUはJUBよりはむしろBĀUに内容が近く、BĀUを基にしている可能性が考えられる。

また、BĀU I 3では、不死の獲得のために、ある詩節を低唱することが規定される。これは、実際のソーマ祭において行われる、天界上昇を目的とするマントラの低唱に倣って作られたものであることは、既に先行研究によって指摘されている。本稿では、BĀU I 3における、氣息を巡る様々な思弁が、この不死を目的とする詩節の低唱の効力を根拠付けるものとなっていることを指摘した。更に、BĀU I 3とその並行箇所において、食物を摂取することが氣息の機能とされているが、この考えがブラーフマナに見られること、氣息とUdgātar祭官との結び付きの背景には、Udgātar祭官の職能を巡るブラーフマナ文献の議論があることを指摘した。

(4) BĀU-M I 2 ~ BĀU-K I 4

本章（以下、BĀU I 4と略記）は、アートマン／ブラフマンから世界の諸事物や四階級が創出されたとする、世界の創出譚を枠組みに構成されている。

筆者は、BĀU I 4に見られる世界創出の描写が、Ṛgveda X 90「Puruṣa-sūkta」に倣ったものである可能性を指摘した。本章は「太初において、他ならぬアートマンが、この（地上）を支配していた、人の様態をとって (*puruṣavidha-*)」と始められる。ここには、アートマンが、Puruṣa-sūktaに説かれるPuruṣaに他ならないとする解釈の存在が推測される。これは、当時、Puruṣa-sūktaを巡って行われたであろう、祭官学者たちの議論展開の一つを反映したものと考えられる。また、この、アートマンがPuruṣaの様態を取っているという表現は、個人存在の主体としてPuruṣaが人間の体内に存するという、既に成立していた観念を念頭に置いている。

また、本章には一種の「業 (*kārman-*)」の説が見られることを指摘した。ここでは、「業」は、来世の生を成立させる要素と捉えられていると考えられる。これは、次生の在り方を決定付けるものとしての従来の*iṣṭā-pūrta*の説を継承、発展させたものであり、Yājñavalkyaの説く定式化された「業」説への過渡的段階にあるものと見ることができる。

本章ではさらに、ブラフマンが説かれ、それから世界が生じた世界原因であるとされている。ブラフマンを明瞭に世界原因として説くのは、恐らく、BĀU I 4が始めであると思われる。また、「ブラフマンについての知識」を巡る議論が導入され、それを「自分自身をブラフマンであると知ること」とする。本章では、アートマンによる世界創出と並行して、ブラフマンによる世界創出が語られる。従来、これはアートマンとブラフマンとに関する教説を別個に説いたものと解されており、あるいは、テキストの成立に複数の層を想定する研究者もいる。筆者は、ブラフマンによる創出の叙述中にもアートマンが主

語となっていると判断される箇所があることを指摘した。即ち、本章ではブラフマンを、創出時におけるアートマンの一側面と捉えている可能性がある。この点と、上述した「ブラフマンについての知識」の内容とを考え合わせるならば、本章は「梵我一如」の思想を基盤にしていると結論づけることが出来る。

(5) BĀU-M I 3 ~ BĀU-K I 5

本章（以下、BĀU I 5と略記）は、全体として、呼吸機能を中心テーマとして互いに緩い連関を持って結びつく、五つの独立した部分から構成される。BĀU I 5では、呼吸機能に、ṚgvedaのPuruṣa-sūkta以来、一般に対応させられる「風」ではなく「月」が対応させられている。更に、呼吸機能そのものが月として表象され、月が空に見られない朔の夜には地上の生物の中に宿っているものとされる。この呼吸機能と月との関連付けは、ブラフマナに見られる新月満月祭を巡る神学議論、食物の循環に関する思弁、「食物の摂取主体としての呼吸機能」という観念などの複数の要素の総合の上に形成されていることを、具体的箇所を挙げて指摘した。

また、BĀU I 5には、死後における生の存続が問題とされ、父親が臨終時に行うべき一種の儀式が説かれる。父親は、死後、呼吸機能を始めとする生体諸機能を伴って息子に入り込み、地上での生を継続する。同時に、「神々に属する、不死の」生体諸機能が父親に入り込み、天界において神としての生を得るとされる。この点について、同様の思想を説くJaiminīya-Brahmaṇaにおける祭式解釈との比較を行い、祭式がもはや来世を獲得するための条件とされず、それに代わって知識が重視されていることを指摘した。

BĀU I 5では、個人存在の主体であるアートマンは、呼吸機能、言語機能、思考器官から成るとされ、中でも呼吸機能が中核的な役割を担うものと考えられている。この呼吸機能に対して付される「動揺せず、したがって破損しない」という形容について、BĀU-Kに見られるYājñavalkyaのアートマンの形容との類似性に着目し、本章に見られる、個人存在の主体の中核を呼吸機能とする考えは、後のアートマン説が確立する前の、過渡的段階を示すと結論づけた。

(6) BĀU-M I 4 ~ BĀU-K I 6について

本章（以下、BĀU I 6と略記）は、わずか三節からなる短い章であり、これまで殆ど研究がなされていない。本章は、世界を「名称」、「形態」、「行為」の三つの要素から構成されているものと説く。筆者は、「行為」を世界の構成要素の一つに挙げている点に本章の特色があることを指摘した。本章における「行為 (kārman-)」が、既に後の「業」説におけると同様の意味を有するかどうかは確定できないが、いずれにせよ、「行為」が当時の学者間の議論における、一つの重要な主題とされていたであろうことを伺わせる。

BĀU I 6は、個人存在の主体としてのアートマンを「不死」であるとし、またそれを「呼吸機能／氣息」であるとする。本章もまた、BĀU I 5と同様に、Yājñavalkyaの教え (BĀU IV 4) に見られる完成したアートマン説ではなく、呼吸機能を個人存在の主体の中核と見るより古い段階を示している。ただし、祭式を離れ、人間存在そのものの中に「不死」を見出すという点で、ブラフマナ期よりも明らかに進んだ思想内容を示している。

本稿では、I 2の内容検討の付論として、BĀUに含まれる複数のvamśa (師資相承の系譜) についても論じた。BĀU-MとBĀU-Kとの構成、内容上の差異は、それぞれが有するvamśaにも見られる。両派の全てのvamśaを比較、検討することから、(1) 両派のvamśaの内容は、両派が共通のテキスト伝承を持

ちつつ、ある時点で分派した歴史的事実を反映すると考えられること、(2) BĀU第Ⅰ－Ⅱ、Ⅲ－Ⅳ巻は、ŚBにおいて中心的役割を果たすYājñavalkyaとŚaṅḍilyaの二人の中、アグニチャヤナ祭の権威である後者の流れをくむ祭官学者達によって編集されたと考えられること、を指摘した。

最後に、BĀU Ⅰ 全体を概観し、今後研究すべき諸点を列挙した。巻末には文献一覧を付した。

論文審査結果の要旨

本論文は『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』第1巻に関する文献学的研究である。「総論」24頁、「テキスト」29頁、「翻訳」30頁、「分析と研究」71頁、その他合計172頁よりなる。

『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』はヴェーダ語で書かれた最古のウパニシャッドの一つで、6巻から成り、複数の成立層と編集過程とを伺わせる。第1巻は第2巻と共に「蜜の章」として編集伝承されており、全体として最古の部分を構成する。先行する祭式文献群「ブラーフマナ」の中で展開した祭式の効果を巡る論証・思弁を基礎として、「ウパニシャッド」という哲学的文献群が、自己と宇宙の構造に関する理解を背景に、死後の問題を中心主題として構築されていく、その初期の段階を反映している。時代としては、紀元前550～500年頃が想定される。「業」と「輪廻」という公理の確立によって、後の仏教、ジャイナ教、バラモン教諸学派の基盤を確立した同ウパニシャッド3－4巻（ヤージュニャヴァルキヤの章）に比べると、一段古く、個々の思想は未だに萌芽的段階にある。その内容を理解するためには、先行する「ブラーフマナ」の祭式を巡る議論の中に先行要素を一つ一つ探しだし、確認しながら『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』の議論と照合し、相互に分析してゆかなければならない。従って、本研究は、「ウパニシャッド」からみた「ブラーフマナ」研究ともなっている。本論文が取り扱っている「ブラーフマナ」部分には、これまで厳密な意味での研究対象とされてこなかった部分が多いだけに、本論文に示された成果はヴェーダ学全体に重要な意義をもつ。

「テキスト」は、同書を伝える2学派の原典を対照させながら、それぞれの諸刊本とそれらから知られる写本情報を総動員して復元したものである。これまでの研究は、基本的にシャンカラ（紀元後8世紀初頭）が注解を加えたカーヌヴァ派の流布本に基づいてなされてきた。シャンカラがアクセント表記をもたない伝承を目にしていたことは既に明らかにされている。アクセントが解釈を左右することはしばしばあり、アクセント伝承の確認はヴェーダ語文献の研究に必須の事項である。本論文は、ヴェーダ語に対する確かな理解に基づき、アクセント表記をも含めて、同ウパニシャッド第1巻に初めて信頼できるテキストを提供した。

「翻訳」は、校訂テキストに基づく和訳である。注に盛り込まれた内容は、語彙、文法（語の形成法、アクセント、活用、機能）、シンタクス、祭式用語の解釈、思想史上の概念などの多岐に亘り、文意の理解、翻訳の確定に資するばかりでなく、独立の小論文に値するものが少なくない。殆ど全ての脚注に新たな成果が込められているが、具体例の指摘は省略する。言語に関しては、『リグヴェーダ』から古典期までの言語史を視野に入れ、必要に応じて歴史文法の知識を援用するが、この方法こそ、これまでのウパニシャッド研究に欠けていた根本的問題点であることを、改めて浮き彫りにする結果となっている。祭式に関連する事項への注記も、簡潔ながら信頼すべきものとなっており、理解の正確さを証している。研究史への言及にも過不足ない。

「分析と研究」は、「翻訳」に示された理解を基に、第1巻全6章のそれぞれについて文意を解説し、

その意義を解明し、先行するブラーフマナ文献や他の平行箇所を精査に基づいて成立過程を解明したものである。

第1章と第2章は、マーディヤンディナ (M) 派では『シャタパタブラーフマナ』本体の「アグニチャヤナ (大規模火壇設置祭) の秘義」の末尾に編集され、カーヌヴァ (K) 派では、『グリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』の冒頭として編集されている。「師資相承次第」の位置と内容の問題がこれに関連する。「師資相承次第」は2、4、6章の末尾に付されているほか、M派では「アグニチャヤナの秘義」の末尾にあるものが、K派では全ウパニシャッドの末尾に置かれたものに相当する。ここには、白ヤジュルヴェーダ学派がウパニシャッドを作成編集してゆく出発点となった経緯を探る鍵が隠されており、論文提出者は、解明に向けて確実な資料を提出した。出版の折りにはもう一步踏み込んだ仮説の提出が期待される。内容は、アグニチャヤナとアシュヴァメーダ (馬の犠牲を中心とする大規模祭) という2つの祭式の神秘的解釈と両者の結合を中心に構成されている。論文提出者は先に発表した論文において、難解な *arka-* の語の解明に成功しており、これを基に、これまでよく理解できなかった内容を見事に解明している。その際、ここに見られる思想を構成する諸要素を、『リグヴェーダ』以来の展開の中に探り、跡づけることに成功している。一種の生前葬であるアグニチャヤナという祭式によって「死が自己を (天界に) 作る」という論題は、後に大きな発展を見せなかったとはいえ、天界における再死 (つまり地上への再生、仏教の「生」) を理解する上で重要である。

第3章には「氣息」とサーマン (ソーマ祭で歌われる讃歌の旋律) を巡る思弁が見られ、サーマヴェーダの学派で成立した思弁の影響が伺われる。論文提出者はサーマヴェーダ学派に属する2ウパニシャッドとの平行箇所を精密に検討して、ここでも、ウパニシャッド成立史理解に確実な視点を提供した。

第4章は自己の原理「アートマン」からの世界、祭式、諸事物の創造、宇宙原理「ブラフマン」についての考察、それらに基づく人間存在と世界 (来世) に関する知識、を扱っている。ここに、カルマン (業) 理論の原初形が見出されることを指摘しているが、説得力がある。

第5章は関連の薄い5つの主題から成り立っている。祭式と個人の諸機能、死後の問題などが短い文で論じられており、後に展開する世界観の萌芽形を見ることができる。中でも、アートマンについて述べられる文が、後のヤージュニャヴァルキヤの説として確立するアートマン論に繋がるという指摘は重要である。

第6章については、この世の諸存在を名称、形態、行為の三者から把握し、祭式を越えた個人存在の不死性へと繋げる議論の展開を確認している。

論文提出者のテキストの校訂、翻訳とその注記、分析と研究は、これまで、言語、祭式、思想史の各分野で成し遂げられた研究史の成果を踏まえ、それらを総動員して達成された高水準のものである。ここに示された成果を見ると、同テキストは、従来ヴェーダ文献としては理解されることなく、事実上、後に発展した哲学学派の解釈を接ぎ木した表面的処理の対象に留まっていたと言えるように思われる。ここに初めて、ウパニシャッド研究に本格的段階が開かれたと言っても過言ではない。課題としては、ここに提出されたテキストの厳密な理解を基に、重要な諸概念、例えば、カルマン (業)、プラーナ (氣息)、アートマン、ブラフマン、名称と形態、などについて、その中身を改めてまとめ、それらを思想史の展開中に位置づける作業が必要となろう。研究史について、論文提出者は原典理解に直接関わるものだけに言及を限定しているが、本論文を利用する一般のインド学者や隣接領域の研究者にとっては、これまで用いられてきた翻訳、紹介、研究などについての言及や、批判的評価が提供されると理解の助けになる。

上記の検証に鑑み、本論文は、提出者が博士 (文学) の学位を授与されるにふさわしい資格を備えていることを十分に証しているものと判断される。